

# 浮舟についで

藤原とも子

## はじめに

幼い日、よくささの葉で舟を作り、小川に流して遊んだ。「浮舟」ということばに、あつちに揺れ、こつちに揺れ、流れのままに翻弄されるささ舟を想像する。この不安定な、たよりないことば。「浮舟」という名は、後の読者によってつけられたという。どんなはない運命をたどる女か。

浮舟は、紫式部の構築した膨大な源氏物語世界の、いわば最後の「砦」とでも言うべき女性である。当世切つての貴公子、薫と匂宮に愛され、苦悩の極限の錯乱状態で死を選ぶが、果たされず蘇生する。その後の彼女は驚くべき強さで現実世界を厭離し、ひたすら出家を願う。出家が叶えられて後も、決して薫に会おうとはしない。現世の誘惑に身を固くして耐えている。

浮舟は、今までの女主人公たちと一風変わっている。八宮を父としながらも、母が侍女であるがために疎まれ、東国の継父のもとで成人した「あづま女」である。そして、無性格、無意志な女性とも言われる。

このような女性を、何故式部は主人公に選んだのだろうか。しかも、『源氏物語』の最後を飾るべき重要な場面に。そして、浮舟を

主人公にした意図に、生いたちがどう関わってくるのか。私はこのような疑問を持たずにはおられない。そこで、これらのことを中心に考えてみたいと思う。

原文の引用は、日本古典全書『源氏物語』（池田亀鑑校註）に拠り、（ ）には、巻名と頁数を書き入れた。長い引用は二段下げ、短かいものは「」で囲んだ。参考文献の引用は原文のままとし、「」で囲んだ。著者名・書名などには注をつけ、この論文の最後に掲げた。

## 一、生いたち

浮舟は、「宿木」巻後半突如として物語に登場する。大君のゆかりを求めてさまよう薫の愛が、中君に執拗に向かつて行った時、匂宮と薫に挟まれて苦しむ彼女は、自らの地位と幸福を維持するため、読者が予想もしなかつた異母妹のことを口にするのである。

人形のついでに、いとあやしく思ひ寄るまじき事をこそ思ひ出で侍れ。（宿木一九三）

これが、浮舟についての最初のことばである。薫の反応を伺いながら、中君は次のように続ける。

年頃は世にやあらむとも知らざりつる人の、この夏頃遠き處よ

りものして、尋ね出でたりしを、うとくは思ふまじけれど、またうちつげに、さしも何かは睦が思はむ、と思ひ侍りしを、先づ頃來たりしこそ、あやしきまで、昔人の御けはひに通ひたりしかば、あはれに覺えなりにしか。形見など、かうおぼしのためふめるは、なかなか何事も、あさましくもて離れたり、となむ、みる人々も言ひ侍りしを、いとさしもあるまじき人の、いなかではさはありけむ。(宿木一九四)

大君との思い出の地宇治に「人形」でも作って、と考えていた薫にとつて、中君のことばは「夢語」に聞える。さすがに心がひかれるが、

さばかりの際ななれば、思ひよらむに難くはあらずとも、人の本意にもあらずば、うるさくこそあるべけれ。(宿木一九七)

と躊躇する薫である。やはり永遠の女大君が忘れられない。彼はしばしば宇治に通う。そんなある夜、舟の尼から「形代」の素性について詳しく聞き、薫の心に静かな好奇心が湧いてくるのであった。その好奇心は、長谷詣の帰る宇治に寄った浮舟を垣間見ることによつて、「ただ今もはひ寄りて、世のなかにおはしけるものを、といひなぐさめまほし」(宿木二二九)という「発動的」なものとなつて行くのであった。この時の薫の異常な感動は、浮舟の「形代」としての運命を暗示しており、彼女との愛にどうすることもできない壁を感じないではいられない。

父は八宮、母は北の方の姪だという。北の方が亡くなってまもなく八宮に情をかけられて浮舟が生まれたが、八宮は「あいなくわづらはしくものしきやうに思しなりて、またとも御らんじ入るる事も

なかりけり」(宿木二〇二)。しかたなく、母は娘を連れて地方官の妻となつて下つて行つたのであった。

かくして浮舟は、受領の娘として京から遠く離れた「あづま」の国で人と成るのである。そして、その浮舟を背後から強くささえてゐるものは、八宮に顧みられなかつた母の娘に対する異常なまでの母性愛である。

私は、『源氏物語』五十四帖の最後に登場する女性浮舟に、作者紫式部が何か大きな使命を与えようとしてゐることを感じるのである。従つて、浮舟の造型には特に注意を払ふ必要があると思ふ。

母が浮舟を連れて嫁した常陸介には、先妻の子も多く、二人の間にも子供ができた。しかし、彼は浮舟を他の子供達と同様には扱わなかつた。そのような常陸介の態度に、母はますます浮舟に対する哀れみと期待をつのらせるのだつた。どうかして良い縁組をして見返してやりたいと、娘を美しく装わせ、大切にかしづく母である。そんな浮舟だから実娘と見えても不思議はない。教養が低く、田舎者の常陸介でも財力はある。そんな彼の所へは、財産目当ての求婚者が大勢訪れた。左近少将もその一人だつた。浮舟を実娘だと信じる彼は盛んに求婚する。予てから理想の縁組みをと思ひ悩む母は次のように考える。

この君は人柄もめやすかなり、心定りて物思ひ知りぬべかなるを、人もあてなりや、これよりまさりて、ことごとしき際の人

はた、かかるあたりを、さいへど尋ね寄り。 (東屋三三四)

一存で婚礼の準備を進める母、日どりも決まつた頃、真相を知つた少将は素早く実娘に鞍替えするのである。このような非人道的なことがまかり通る世界。ここでは、京の尺度で物を計ることはでき

ない。永井和子氏<sup>①</sup>はこの世界を、「『心』ではなくて富と権勢が、あらゆるさまに人々を支配する」と言い、秋山虔氏<sup>②</sup>は、「貴族的伝統的価値が酷薄無慚に否定され」る世界と説明する。

それでは、このような世界での生活が浮舟にどのような影響を与えたであろうか。物語の中で、彼女の東国での生活について具体的なことは何も述べられてはいない。その中から性格を引き出すことは少々強引である。そこで、私なりに考えてみた。

「帯木」巻に、有名な「雨夜の品定」と呼ばれる部分がある。源氏・頭中将・左馬頭・藤式部丞の四人が女性論を戦わせるのであるが、その一人、頭中将は女性の階級を上・中・下の三つに分けて、それぞれの特徴を端的に説明している。彼は中の品の女性について次のように語る。

中の品になむ、人の心々、おのがじしの立てたる趣も見えて、  
わかるべき事方々多かるべき。  
(帯木一八八)

そして、中の品の説明に左馬頭の次のようなことが見える。

なりのほれども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へる  
ことも、さはいへどなほ異なり。  
(帯木一八八)

つまり、彼等が女性として興味を持つのは、「人の心々、おのがじしの立てたる趣」の見える個性的な女性、中の品に属する女性である。そして、左馬頭のことばから、常陸介のような成り上がり者の娘もそれに属することがわかる。

それでは、浮舟に「人の心々、おのがじしの立てたる趣」があると言えるだろうか。実父に認められず、継父常陸介からも継子扱いにされる浮舟を憐れんで、盲目的な愛をそそぐ母に育まれた彼女こそ、まったくの箱入り娘ではなかったか。彼女の感情は、すべて母

である中将の君が吸収し、彼女の意志も感性も無視されたところですべてが準備され、崩壊して行つた。しかし彼女の二十年間の生活が、受領の娘として、身体を張って作られた富と、生き生きとした生命力をたたえた地方の素朴な農民の中で送られたことを見逃してはならない。その生活が、野性的な強さと生命力を彼女の心の深部に無意識のうちに植えつけたと考えることもできよう。もう一つ、大勢の兄弟の中で育つたということも注意する必要がある。

八宮に認められず、貴族社会から去つて、現実世俗の世界に入つて行つた中将の君は、今又、その世界の代表的人物である少将に、無残にも裏切られるのである。その屈辱から抜け出るために、又元の貴族社会へ帰つて行くことも不思議ではない。なぜなら、彼女を裏切つた八宮はもうこの世にはいないのだから。

行き場のない浮舟の不運を嘆く母は、二条院の中君に彼女の世話を依頼するのである。この時点での母には、「上流貴頭の頹廢を女の運命において深々と感取した生活のなかの生きた思想」<sup>③</sup>、つまり彼女の運命から自身で見いだした論理とも言うべきものが強固に存在している。これは、貴族社会・俗物的社会両面の苦渋を嘗めて来た彼女にしてようやく見いだした客観的な論理である。この部分の原文を引いておこう。

いかにもいかにも、二心ながらむ人のみこそ、めやすくだのも  
しきことにはあらめ。わが身にても知りなき。故宮の御ありさ  
まは、いと情々しく、めでたくをかしおはせしかど、人数に  
もおほざざりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。この  
いといふかひなく、情なく、さまあしき人なれど、ひたおもむ  
きに二心なきを見れば、心やすくて年ごろをもすぐしつるなり

(東屋三四七)

「一心なからむ人」、これが第一条件である。しかし、この母の論理が脆くも崩壊する時が来る。二条院に着いた母は、中君の生活を見、また匂宮を隙見することによって、「織女ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな」(東屋二五三)と思ひ、「わが女もかやうにてさしならべたらむには、かたはならじかし」(同上)、さらに「なほ今よりのちも心は高くつかふべかりけり」(東屋二五四)と、強引な考えに達するのである。そして、論理の崩壊が決定的になるのは、薫を見てからである。

乳母ゆくりかに思ひよりて、たびたび言ひしことを、あるまじきことに言ひしかど、この御ありさまを見るには、天の川を渡りても、かかる彥星の光をこれ待ちつけさせめ。

(東屋二六二)

批判精神を持つて客観的に貴族社会を見ていたはずの母は、ここに至つて薫・匂宮を中心とする上流貴族に、全面的に降服せざるを得なかつたのである。そして、中君に万事を任せたまふ浮舟を残して帰邸するのである。「この母の行動を、出世欲のあらわれと見ることもできようが、ここにはそれだけでは片づかぬものがあるようである。(中略) 出世欲といふことばの持つ臆面のないやらしさは別の、ひたむきな、女のあはれさというやうなものがありそうである」<sup>⑤</sup>。

## 二、浮舟の苦惱

母の愛という「箱」の中から初めて放り出された浮舟を待つていたものは、好色の匂宮であつた。匂宮の強引な態度に、浮舟は「た

だいみじう死ぬばかり」に思ひ、中君でさえも当惑するばかりだつた(東屋二六九)。幸い内裏から明石中宮の病いを伝える使者が来て、匂宮は「いみじうらみ契り置きて」、やむなく出て行かざるを得なかつた(東屋二七一)。重大事には至らなかつたが、匂宮の性分からはこのまま浮舟を放つておくはずがない。不安を感じた母は彼女を中君のところから引き取り、三条の山家に移すのだつた。このことがあつて、母は薫を理想に描くようになる。

一方、浮舟の移つた三条の山家はまだ造りかけて、東国訛の者ばかりが出入りする荒れた所だつた。そこでの佗住居は若い彼女に、華麗な二条院の生活を懐しく思わせ、「恐しき夢」(東屋二七一)の心地がしたあの時の、「あやにくだち給へりし人の御けはひ」(東屋二八四)さえも印象深く思ひ出されるのだつた。ここで、既に匂宮は薫に一步先んじて浮舟の心を捕えていることに気づく。

薫が行動に出たのは、その後のことである。舟の尼の計らいで一夜を語らうた彼は、翌朝まだ明けきらないうちに、自ら浮舟を車に「かき抱きて乗せ」、隠家を出るのだつた。結婚を忌むという九月のことである。「さばかりの際なれば、思ひよらむに難くはあらず」(宿木一九七)、このことばが甦る。相手の身分がこうも薫を変えるのか。

宇治に近づくにつれて、「来し方の恋しさ」がまさり、「霧立ちわたる心地」(東屋二九四)のする薫にはもはや浮舟は浮舟その人ではないのだ。楽しいはずの旅も、九月の結婚、尼姿、涙などで不吉な運命を暗示する。薫の浮舟を見つめる目には、いつも大君の面影が重なつて映る。薫にとって浮舟は大君の形代の意味しか持たない。宇治に着いた薫は、浮舟の美貌に大君を思ふ一方、彼女のこれから

の扱いに心を使うのだった。薫は大君との思い出を同じこの宇治の地で、形代である浮舟に繰り返させようとしているのである。何というあわれな男か。浮舟に物足りなさを感じながらも、「あやまりても、かう心もなきはいとよし、教へつも見えてむ」(東屋二九七)と、将来に期待を寄せる薫である。ここで、浮舟に対する穏やかな、広い愛情を見逃してはならない。

のんびり構える薫と対照的に、匂宮は二条院で会った女が忘れられず、中君を責めるが、「御さまよからぬ御本性」(浮舟一四)を知る彼女は、黙して語らない。正月になって宇治から届けられた文と祝い物が、侍女達の不注意から匂宮の目にふれるところとなるのである。匂宮は、中君の様子とその文面から、あの時の女からのものだと思つたのだ。薫の行動にかねてから疑惑を持っていた匂宮は、薫方の事情をよく知る大内記から秘密を聞き出し、彼が捜していた女が薫の囿っている人だと知るのである。しかし、このようなことで諦める宮ではない。彼には薫にない愛に対する一途さ、積極性がある。

作者は、この辺から、浮舟に対する二人の愛を意識的に描き分けている。何といつても、光源氏の「まめ心」と「すき心」を分け持つ二人である。捜していた女が宇治にいと知った匂宮は、性来の「すき心」から「宇治へしのびておはしまさむこと」(浮舟二二)ばかりを思いめぐらすのである。彼は密かに宇治に行くことを計画し、実行に移す。そして薫を装って忍び込むことに成功するのである。

女君は、あらぬ人なりけり、と思ふに、あさましういみじけれど、聲をだにせさせ給はず。(浮舟二九)

浮舟が、人違いであることに気づいた時は、もう遅かった。匂宮と知った彼女は、中君のことを思い、「かぎりなう泣く」(浮舟三〇)ばかりだった。

朝になって匂宮と気がついた右近は、過失の重大さに心が乱れるが、最後まで偽り通そうとする。自らの過失を「宿世」という名目で逃れようとするのである。そして、「長谷の観音、今日事なくて暮し給へ」(浮舟三三)と願を立てる彼女である。

それでは、身分を物ともせず、激しい愛情を傾ける匂宮に対して浮舟は、どのように反応するのであろうか。

女、いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、時の間も見ざらむは死ぬべし、と思しこがるる人を、こころざし深しとは、かかるを言ふにやあらむ、と思ひ知らるるにも、あやしかりける身かな……(浮舟三三)

私は、この浮舟の気持に、二十年間の東国生活で無意識のうちに身につけていた野性味のようなものの一端を見る思いである。大勢の兄弟の中で、異常とも思える母の愛にすっぽり包まれて育った彼女にとって、この宇治の地は暮し難かったに違いない。そんな時の匂宮の訪れだから一層彼女の心にしみたのだろう。しかし、注意しなければならぬことは、匂宮の愛を肯定しながらもすぐ次に「誰も、もののきこえあらば、いかに思さむ」と、理性的な心に帰り、中君に対する義理、世間の思惑を気にするのである。平素はつれづれをなぐさめる術もなく長く感じる一日が、匂宮の別れが近づくとを嘆く気持に引かれてか、今日はあつけなく暮れてしまった。

女はまた、大将殿を、いときよげに、またかか人あらむや、と見しかど、こまやかに匂ひ、きよらなることは、こよなくお

はしけり、と見る。

(浮舟三五)

匂宮にひかれる彼女にさらに抜け目なく、「心よりほかに、え見ざらむ程は、これを見給へよ」(同上)と、男女の添ひ臥した絵を描き与える彼である。翌朝、名残を惜しむ匂宮に、「限りなくあはれ」(浮舟三八)と思う浮舟だった。

彼女の身に何があつたかも知らぬ薫は、久しぶりに宇治を訪れるのであるが、ただちに浮舟の所へは行かず、寺に詣でる悠長さである。夕方訪れた薫の立派さに浮舟は身の竦む思いである。

女、いかで見えたてまつらむとすらむ、と、そらさへはづかしく恐しきに、あながちなりし人の御ありさま、うち思ひ出でらるるに、またこの人に見えたてまつらむを思ひやるなむ、いみじう心憂き。

(浮舟四三)

やはり浮舟は匂宮のことが忘れられないのである。しかし、薫の「言多からず、恋しかなしとおりたたねど」「さまよき程にうちのたまへる」(同四四)のを聞くと、「行く末長く人の頼みぬべき心はへなど」(同上)が格別であることを感じ、薫に「憂しと思はれ」た時の心細さに今までの自分を反省するのだった。このように思い乱れる浮舟の様子を、薫は「こよなうもの心知り、ねびまさりにけり」(浮舟四四)と喜ばしく思うのである。

男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で、女は、今より添ひたる身の憂さを歎き加へて、かたみにもの思はし。

(同四五)

薫は、大君との思い出を懐しみ、浮舟は匂宮の出現によって加わつた身の辛さを歎いているのである。「かたみにもの思はし」二人の間には、どうすることもできない心の隔たりがある。薫には浮舟

を疑う気持など皆目ない。煩悶する彼女の姿に、亡き大君の面影を見いだし一層情愛を深める彼である。

匂宮は、宮中で薫の様子を見るにつけ、居ても立ってもいられず、身をやつして宇治に出かけた。そして、翌日橘の小島に彼女を連れ出し、二日間浮舟との愛に溺れるのだった。橘の小島にさしかかった時、緑の深さに愛を誓う匂宮の歌に、彼女も、

たちばなの小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ  
(浮舟五〇)

と答えるのだった。この歌は、不安定な女の心を露呈しており、不吉な予感を伴う。しかし、匂宮はそれに気づかない。彼は身も心も瞬間の愛に浸りきっている。

匂宮のこのような愛を、中野幸一氏は次のように述べる。「世の風評や周囲の非難や相手の思惑などもとせずに、ひたすら突き進んでゆく所に特徴がある」。浮舟の心には、理性で制御することのできない本能的なものが、そんな匂宮の愛を媒介として燃え上がるのである。浮舟と匂宮は一つの愛に燃えているのである。二人はこの限りでは一体である。

この二日間の思い出は、薫のどかな愛と比較するが故に一層鮮明だった。「やっぱり下賤の育ち、女は官能に負けてしまふたちなのだ。あずま育ちの野性はしずかな薫の愛情を理解できないのである」<sup>①</sup>。しかし、理性を取り戻した彼女は、中君に対する義理を思い、薫の愛を思う時、恐怖と後悔でいっぱいになるのだった。若い浮舟にとって、情熱的な匂宮にひかれることは当然だが、薫をすてきれないからこそ苦しむのである。

そんなある日、二人から文が届く。ここでも作者は二人を対照す

ることを忘れない。薫の文は「白き色紙にて立文なり」。これに對して匂宮のものは「いと多かるを、ちひさく結びなし給へる」(浮舟五八)というぐわいである。浮舟の反応はどうかであらうか。「これかれと見るもいとたてあれば、なほ言多かりつるを見つつ臥すのである。浮舟の返書に、「宮はよよと泣」き、薫は「うちも置かず見」るのだった(浮舟五八・五九)。

まもなく、煩悶する彼女の所へ、薫から京へ迎える日を伝えてくる。一方、薫方の情報が筒抜けの匂宮は、それよりも先に、と考える。この場に及んで浮舟は、

さそふ水あらば、とは思はず、いとあやしく、いかにしなすべき身にかあらむ、と、浮きたる心地のみすれば、母の御許にしばわたりて、思ひめぐらす程あらむ。(浮舟六〇・六一)

と、母を頼るけれど、作者は彼女を母からさえも引き離してしまおうとする。母は異兄妹の出産で手が離せないのである。

二十余年の母の念願がようやくかなえられる日が来るのである。

薫に引き取られる日を疑うことなく準備にいそむ母と乳母の姿は、彼女を限りない不安と後悔に追いつめるのだった。浮舟の苦悩を青木生子氏<sup>⑧</sup>は、「薫の心深い誠実さと匂宮の若々しい情熱にそれぞれひかれる浮舟の心情は、彼女の恋愛に内在する精神的なものとの官能的なものとの分離と葛藤の姿でもある」と分析する。さらに、この「浮舟の心情」は、そのまますべての女性が根源に持つものであり、いつの時代の女性にもあてはまる女心であろう。そして、この心情を極限まで追求し得るところに浮舟の造型が生きてくる。高貴な女性であれば、これほどまでに苦しみはしないであろう。

よからぬことを引き出で給へらましかば、すべて、身には悲し

くいみじと思ひきこゆとも、また見たてまつらざらまし。

(浮舟六四)

この母のことばに、「心ぎももつづれ」る心地がし、「なほわが身をうしなひてばや」という状態にまで追いつめられるのである。宇治川の荒々しい水音は、彼女の苦悩を一層ひき立てる。よく人の命を奪う水だと侍女達が話している。

とうとう恐れていた日が来た。匂宮のことが薫の知るところとなる。薫は宮を非難し、浮舟に失望する。そして皮肉たっぷりの文を送ってくる。そんな彼でも、やはり今彼女を失うことは堪え難いのである。浮舟の将来を思いやり、「いとほしく」「なほ棄てがたく」(浮舟七一)思うのだった。このような薫と対照的に、浮舟の心は事の重大さに打ちのめされるのだった。

いよいよ情勢は緊迫する。「浮舟の心理も行動も、水も洩らさぬ緻密さをもって仕組まれた、客観情勢に対応するものにほかならない。いわゆる客観的相関物と別に、彼女の思惟も感性もありえないのであった」。秋山虔氏<sup>⑨</sup>は、浮舟が死に追い込まれる必然性をこのように説明する。なるほど彼女を死へ駆り立てる情景設定、脇役の活躍は素晴らしい。右近は姉の三角関係を話し、このようなことは身分の上下を問わず起こり得ることであり、「死ぬるにまさる恥」(浮舟七四)とまで言う。右近も侍従も、浮舟が匂宮にひかれていると思っているのである。彼女の心は否定する。

心地にはいづれとも思はず、ただ夢のやうにあきれて、いみじく焦られ給ふをば、などかくしも、とばかり思へど、頼みきこえて年ごろになりぬる人を、今はともて離れむ、と思はぬにやりこそ、かくいみじとも思ひ亂るれ。

(浮舟七六)

そして「いかで死なばや」(同上)と口にするのである。警備はさらに強固になる。二人の男に懸想されて死んで行つたという昔物語のことも自然思ひ出されてくる。このままだと、どちらに從つても不幸なことは起こるだろう。いっそのこと死んでしまつた方が、後々まで「人わらへ」になるよりましだ。このような浮舟の異常な決意を作者はこう説明する。

兒めきおほどかに、たをたを見ゆれど、けだかう世のありさまをも知るかたすくなくて、おほし立てたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを、思ひ寄るなりけむかし。

(浮舟七九)

「女のやり方の異常さ、それはまづたく彼女の身分と教養の低さによるのであらう」。

死を決意して、都合の悪い文など整理する彼女に、「親をおきて亡くなる人は、いと罪深かなるものを」(同八〇)という罪の意識、道心のきざしに注意したい。しかも、「親に先だちなむ罪うしなひ給へ」と経を読む心とららはらに、

ありし繪を取り出でて見て、書き給ひし手つき、顔のにほひなどの、向ひきこえたらむやうに覺ゆれば、昨夜一言をだに聞えずなりにしは、なほ今ひとへまさりて、いみじと思ふ。かの、心のどかなるさまにて見む、と、行く末遠かるべきことをたまひわたる人も、いかが思さむ、と、いとほし。

(浮舟八五)

と、匂宮を恋しく思ひ、薫のことをいとおしむのだった。最後の最後まで二人の間をたゆたうのである。夜は眠れぬままに、昼は川の方を見やりつつ、うつろな日を送る彼女に、母から身を案じる手紙

が来た。「誰にもおぼつかなくてやみなむ」(浮舟八七)と、母と匂宮にのみ返書をしたためて、乳母たちの心配を耳に、「妻えたる衣を顔におしあてて、臥」(同八九)すのであった。

「浮舟」巻はここで終っている。入水の場面は描かれていない。「蜻蛉」巻冒頭で女の失踪を告げ、「手習」巻の浮舟の回想の部分がこの時の様子を詳細に語っている。浮舟の死にまで追いつめられる苦悩の過程を述べるつもりが、単なる概略に終つてしまった。

そこで、先に私は、作者が浮舟という人物に何か大きな使命を与えようとしていることを感じると述べた。そのことについて考えてみたい。何故作者は浮舟に「死」という行為を与えたのだろうか。「出家」でなくて「死」。ここに大きな意義があると考えるのである。「女であることのための生きがたさを、源氏物語ほど、くりかえしくりかえし痛切な呻きをこめてかたりつつける作品はないだらう」。秋山虔氏の『源氏物語の世界』の中の一文である。この問題を考える上で重要と思われるので、もう少し引用したい。

平安貴族社会において、一般的に、女は男に寄生し、従属する。男しだいにその人生の幸不幸は規定される。したがって、そこでは、なだらかに目やすきものとして賞愛され、男の顧みに、保護に、値すべき特有の処世術法がつかわれなければならない。そのような女にとって、しかとおのれの好みのすじ、資性に即して個性を形成し、自主的に道をひらいてゆくというような生きかたは、ほぼ決定的にはばまれていってよいであろう。

秋山氏が指摘されるごとく、作者紫式部は誰よりもこのことを身にしみて感じていた。彼女はしばしば、物語の中で登場人物の言葉借りてつづやく。その一例を挙げよう。



女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし。物のあはれ、折をかしきことをも、見知らぬさまに引入り、沈みなどすれば、何につけてか、世に経る榮々しさも、常なき世のつれづれをもなぐさむべき。そは、大方物の心を知らず、いふかひなきものにならひたらむも、生はしたてけむ親もいと口惜しかるべきものにはあらずや。心にも籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする、昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながらうづもれなむも、いふかひなし。

(夕霧六四)

光源氏から理想の教育を施され、成長するにつれて彼の愛を一身に受けていった紫の上は、傍目にはこの上ない幸福者に映つたに違いない。その紫の上の心中である。「女ほど身の処し方が窮屈で、かわいそうな者はない」、この言葉は、当時の女性の運命を回想する時、現実味を帯びて我々に迫って来る。そこには、当時の「閉ざされた女性の運命」を客観的に見つめ、悟つた一人の人間としての態度とともに、女性にそのような運命を強いる社会に対する鋭い批判をも伴っている。男の愛に身を託すより生きる術のなかつた女の身の上に、一夫多妻制の社会は、計り知れぬ不安と苦悩をもたらした。男の手に握られた女の運命、愛を失うことがすべてを失うことを意味する現実。貴族女性の独特な教養と処世術は、そのような世界で培われていった。紫の上も、女三宮の降嫁によって受けた致命的な苦悩を、この教養と処世術でかろうじて乗り越えて来た。この苦悩の中で、すべてを悟つたはずの紫の上でありながら、光源氏の愛を拒んでまで出家の意志を貫くことはできなかった。彼女に残されたたった一つの自由すら、男によって奪われてしまった。これが

貴族女性の運命である。

真実を求めて生きることが許されない社会で、紫式部は『源氏物語』という虚構の世界でのみ、自らの自由な思想を拡大して行くことができた。そして、その中のみ、女性の真実の姿を描くことが可能であった。

浮舟に戻ろう。彼女には、貴族女性の持つ教養も処世術もなかった。と言うよりも、作者は与えなかった。何故だろう。紫の上が理想の女性であるが故に付与することのできなかったもの、作者は、それを託す女性を必要としたからだと考える。そのような浮舟だから、作者は彼女に「愛」の世界の極限の苦悩を与え、さらに容赦なく、出家を飛び越えた死にまで追いやることができたのだろう。

浮舟が死んだ今、作者はこれから先物語をどう展開しようというのだろう。

### 三、新しい生

「蜻蛉」は、浮舟失脚の波紋を描く巻である。朝になって、浮舟がいないことに気付いた右近と侍従は、「身を投げ給へるか(蜻蛉九〇)」と思う。匂宮とのかをすべて取り仕切つた彼女達である。「世の聞え(同九八)」を恐れるあまり、嘆き悲しむ母を説き伏せ、死体のない葬儀を済ますのだった。

女の死を聞いた匂宮は、例のごとく、気も狂わんばかりに悲しむのである、「あだなる御心(蜻蛉一二五)」は、一つの状態に留まることを知らない。悲しみも、時と共に消えて行つた。それと対照的に、宮の嘆きに触発された形の薫は、彼女の死を「佛のし給ふ方便」(同一〇二)として受け止める一方、宇治のような地に一人放

って置いたことを後悔するのだった。そして浮舟のために、念入りな仏事を尽し、母や兄弟の将来にまで心を配るのだった。薫の穏やかな広い愛情は、他人への思いやりの心へと向かうのである。

気を紛らそうとしても、どうしても忘れることのできない宇治の姫君。薫は、失ったものの大きさにあらためて身悶えるのである。

ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへもしらず消えし蜻蛉  
(蜻蛉一五〇)

この歌は、薫の愛の本質、行き着く先を露呈している。彼自身、認めざるを得ないものとなっている。

それでは、浮舟はどうなったのであろう。

その頃横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。  
(手習一五一)

「手習」巻冒頭は、物語の新しい展開を我々に告げる。そして、「なにがし僧都」がこれからの物語で重要な役割を担っていることを感じさせる。宇治の阿闍梨と比較する時、あまりにも人間的な宗教人である横川僧都の造型は、作者の内部で一層深い宗教的世界の志向がなされていることを示してはいないだろうか。

入水し果てたはずの浮舟は、生きていた。作者は、強引とも思えるやり方で浮舟を甦らせる。迷えるまま生を終らすことには、何らの作者の思想的深まりも見いだし難い。浮舟の蘇生は予知しうることだと思ふのである。

長谷詣の帰りの老母の急病を知った僧都は、「山籠りの本意深く今年はお出でし」(手習一五一)と思つていたが、「限りのさまなる親の、道の空にて亡くやならむ」(同)と、急いで下山する。そして宇治院の樹の下で氣を失っている浮舟を発見するのである。「狐の

變化」(手習一五三)かと騒ぐ僧たちをよそに、

まことの人のかたちなり。その命絶えぬを見る見る、棄てむこといみじきことなり。  
(同一五五)

と先ず言い、さらに、生命一般へと言及して行く。

池に遊ぶ魚、山に啼く鹿をだに、人にとらへられて死なむとす  
るを見つつ、助けざらむは、いと悲しかるべし。人の命ひさし  
かるまじきものなれど、残りの命一二をも惜しまずはあるべからず。………佛の必ず救ひ給ふべき際なり。

(同一五六)

と、助けることを主張するのである。しかし当時の宗教家たちが、すべて僧都のような考え方をしてはいなかったということが、弟子達の「たいだいしきわざかな」(同)ということばの中に表われている。僧都のような人間は、むしろ稀だった。

僧都から浮舟のことを聞いた妹尼は、「わが戀ひかなしむ女の、かへりおはしたるなめり」(手習一五七)と喜び、手厚い看護で小野の里へ連れて帰るのだった。

生き出でたりとも、あやしき不用の人なり。人に見せて、夜の河に落し入れ給ひてよ。  
(同一五九)

無意識のうちにつぶやく言葉は、そんな尼を一層悲しませた。

二か月が経ったが、浮舟の病状は回復の兆を見せなかった。心配のあまり妹尼は僧都に下山を請うのだった。ここでも僧都は、一人の女のために弟子達の反対を押し切って修法を行うのである。このような僧都の態度を広川勝美氏は、次のように説明される。

横川の僧都にとって、生身の人間の救済こそ問題であった。僧都は現世を無常と悟って出離を願いながら、しかもその現実に

安心立命の境地をもって生きざることを教えるのが真の仏道である」と認識していたようである。

僧都の祈禱によって物怪が調伏された浮舟は意識を取り戻し、失踪当時を回想する。死を決意した彼女は、密かに外に出るのであるが、烈しい風と荒々しい波音に行くべき道を迷い、思い詰めていると、「いときよげなる男」がやって来て、「いざ給へ、おのが許へ」と言つて抱くのを匂宮だと思つたその時から氣を失つたらしい。その後のことは、全然思い出せない。生き返つた今はただ、「本意」が遂げられなかったことを悔み、我が身を辛く思うのだった。無意識にまで死を願つていた彼女であるが、それさえも許されないと知つた時、初めて「出家」という道に氣づくのである。

尼になし給ひてよ。さてのみなむ生くやうもあるべき。

(手習一六六)

今、彼女は「尼」という姿に唯一の残された生の姿を見た。しかし、それは決して積極的な生への志向ではない。あくまで「死に對する絶望としての出家」の意味しか持たない。

出家を願う浮舟に、僧都は五戒のみを授ける。彼女は決して満足しなかつたが、「もとよりおれおれしき人の心にて」(手習一六六)

強いて主張することもしない。しかし、一度現世を棄てた人間である。そこには、実娘以上に親みを持って接する妹尼をも寄せつけない、強い何物かがある。そして、それが彼女の意志の中ではっきりと形を成してくるのは、娘婿の中將の出現によつてである。人に知られずして終りたいと、常々思つていた彼女であるが、小野を訪れる中將の姿に、「忍びやかにておはせし人の御さまけはひ」(同一七一)を思い出すのである。しかし、妹尼が、中將を浮舟の婿にと考

えていることを知つた瞬間、

あないみじや、世にありていかにもいかにも人に見えむこそ、それにつけてぞ昔のこと思ひ出でらるべき。さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなむ。

(手習一七四)

と、男女の仲を厭わしく思っている自分に氣づくのだった。広川氏は、中將の出現を「浮舟にとつて悲劇的な過去の出来事を思い出すよすがとなるだけ」だと述べ、さらに「浮舟を懸想する行為の一つ一つがそれぞれ浮舟の出離の意志を確固たるものにしていく原因となつている」と続ける。

妹尼の留守中の中將の来訪は、浮舟に過去のすべてを甦らせた。老尼の部屋へ逃げ込んだ彼女は、恐怖のあまり、一睡もできなかった。そして、心憂い自分の半生を回顧する時、

宮を、すこしもあはれと思ひきこえけむ心ぞいとけしからぬ、ただこの人の御ゆかりにさすらへぬるぞ、と思へば、小島の色をためしに契り給ひしを、などをかしと思ひきこえけむ、とこよなくあきにたる心地す。はじめより、薄きながらもどのやかにものし給ひし人は、この折かの折など、思ひ出づるぞこよなかりける。

(手習一九三)

と、匂宮の愛を否定し、薫を恋しく思うのだった。しかし、彼女の現世厭離の心は、「なほ悪の心や、かくだに思はじ」(同)とそれさえも許そうとしない。と言うよりも、強いてそう思い込まそうと必死なのである。次のことばがそのことを的確に表わしている。「心ひとつをかへさふ」(同)。

この夜のうちに彼女は出家を決意した。自らの意志による冷静な決意である。浮舟は、「死」を媒介とした新しい「生」へ自らの意志

で辿り着いたと言える。妹尼のいないのを幸いに、彼女は僧都に懇願し、本意を遂げる。「人間主義」で貫かれた横川僧都の眞の役割はここから始まる。「親の御方拝みたてまつり給へ」という僧都の言葉に、浮舟はさすがに耐えきれず泣き出すのであるが、人間愛に満ちた僧都の説教は、彼女をいたわり、導く。そして、「これのみぞ生ける驗」(同一九九)と思うに至るのだった。

なほただ今は心やすくうれし。世に經べきものとは思ひかけずなりぬるこそは、いとめでたきことなれ、と、胸の明きたる心地し給ひける。(手習二〇〇)

彼女は生きながらにして現世を棄てた。彼女を死へまで追いつめた「世」を自らの意志で棄て得たのである。紫式部が浮舟に付与しようとしたものは、正にこれだった。男の愛にすべてを託すより生きる術のない女、自由を決定的に阻まれた女。そのような「女」としての生き方から、意志を表明できる一人の人間としての生き方への移行の姿を、式部は浮舟という女性に見いだしたかった。この時点で浮舟は、それを成し得ている。そして、その後の浮舟の姿には一種のやすらぎとも思えるものが見えるのである。しかし、そのやすらぎの背後にある横川僧都の支えを見逃してはならない。

読経に専念する浮舟の姿は、出離へひたすら向かっているようではあるが、やはり現世を棄てきれない弱さがある。式部はそんな浮舟を試すかのごとく、何度も何度も彼女に迫る。その最大のものが薫であった。僧都が都で何気なく語った浮舟のことが、薫の耳に入るのである。ただちに、彼は横川僧都の所へ確かめに行く。浮舟の素性を聞いた僧都は、「法師と言ひながら、心もなくたちまちに容貌をやつしてけること、と、胸つぶれて」(夢浮橋二二四)返答に

窮するのだった。そして、隠しきれないことと観念してすべてを語るのである。薫の涙ぐむ姿に深い愛執を見いだした僧都は、「あやまちたる心地して、罪深」(同二二七)く思うのだった。

それでは何故、横川僧都ほどの高僧が、薫の言葉のみで浮舟を出家させたことを罪と感じ後悔するのだろうか。このことを考える上で「手習」巻冒頭の僧都の下山の場面を思い浮かべて見よう。「限りのさまなる親の、道の空にて亡くやならむ、とおどろきて、いそぎものし給へり」(手習一五一)。ここでは、親子の恩愛の情を積極的に肯定する僧都の姿を見いだすことができる。そして又、浮舟の出家の願いをかなくてはやった時の「親の御方拝みたてまつり給へ」(手習一九九)という言葉にもそれは表われている。そんな僧都のことを知ってか、薫は浮舟の母のことをしばしば口にする。自分は浮舟の出家を何よりだと安心しているが、「母なる人なむ、いみじく戀ひ悲しぶなるを」(同二二八)というふうには、である。つまり、僧都は親子の恩愛の情と、薫の深い愛執を認めたが故にとまどうのではある。しかし、薫を既に俗世を棄ててしまっている浮舟に会わせることは、僧都には到底できない。浮舟の実弟である小君に使いをさせることで薫も納得した。

小野の里を通る薫の行列に、聞き慣れた声も混じっている。ふと昔を思い出す自分を「心憂」きものと思い、念仏に紛らわせようとする浮舟の姿はいとおしい。彼女の心は、現世の何物をも受け入れる余裕はないようだ。自らの心の中の葛藤があるのみである。

ここで僧都の消息が問題となってくる。しかし今触れる余裕がないので後に譲ることにする。この消息が還俗勧誘説であるにせよ、非還俗説であるにせよ、浮舟は薫に会うことは愚か、小君にさえ会

おうとはしないのである。僧都自身で導いた浮舟の新しい生は、今や僧都にさえ理解し難いものとなってしまった。だれにも会いたくない。ただ母にだけ会いたい。彼女の抱く母とは、何を意味するのである。浮舟が、迷いながらではあるが一つの強い何かを持っているのに対し、「人の隠しすゑたるにやあらむ」(夢浮橋二四一)と想像する薫はなんと惨めさである。

清水好子氏は、次のように述べられる。「物語が終わるにあたって、女はもう一度はつきり男たちに別れを告げる。女の生存が薫に知らされたのは彼女自身の口から別れを宣言させるためであった。彼女の出家は彼女自身によって確かめられているのである」。

この虚構の世界でのみ自由な思想を拡大してきた紫式部は、ここに至って浮舟と同じように迷えるまま筆を置かざるを得なかった。

## おわりに

「浮舟について」という題目で出発しながら、浮舟という人物にどれほど近づくことができただろう。私が浮舟という人物を見ると、その姿には、常に作者紫式部が影のように付きまとい、それから切り離しては、どうしても考えることができなかつた。浮舟をひとりの人間として、作者から独立させて見ることができなかった。その結果、彼女のすべてを紫式部と結びつけ、底の浅い、平面的なものに終ってしまった。原文の解釈も満足にできない状態で『源氏物語』に飛びついたので誤りだった。論文なんて、まだまだ先の段階だった。私の肩に背負いきれない紫式部の偉大さ、それを探求せんとする諸氏の卓見が私の頭の中でぐるぐる回っている。私の入り込む隙など到底ない。なにもかも中途半端のまま、無力な自

分をまざまざと見せつけられる思いで、この論文を終えなければならないことが心残りである。

私は紫式部という人物に限りない興味を抱く。そして彼女に一步でも近づきたい。そのためには先ず、『源氏物語』を一人で読むことから始めなければならないと痛切に感じる。注釈書なしで読めること、すべてはそれからだ。今のこの気持ち忘れることなく、第一歩からやって行きたい。

注① 仲田庸幸「浮舟登場の文芸的意義」(国語国文論集 10・安田

女子大日本文学科)

② 永井和子「浮舟」(源氏物語講座、第四卷)

③ 秋山 虔「源氏物語の世界」(東大出版会)

④ 秋山 虔 同

⑤ 永井和子 前出

⑥ 中野幸一「源氏物語作中人物像(一)——宇治十帖を中心に——(解

釈と鑑賞 44・6)

⑦ 清水好子「源氏の女君」(塙書房)

⑧ 青木生子「日本古代文芸における恋愛——その本質と展開——(清水弘文堂書房)

⑨ 秋山 虔 前出

⑩ 清水好子 前出

⑪ 清水文雄「源氏物語の男性論」(源氏物語講座、第五卷)

⑫ 広川勝美「浮舟再生と横川僧都」(仏教文学研究、四)

⑬ 広川勝美 同

⑭ 広川勝美 同

⑮ 清水好子 前出

〔評〕

対象を選び、テーマを決めてから、半年少々しか経っていないのに、よくここまで来たと驚嘆する。原文を読みこなす力もあまりついでない段階で、この巨峯のような大作に立ち向かった勇気をますます多としたい。そうして、やろうと思えばやれる、という可能性を実証して見せてくれたことを、何よりも藤原さんのために祝福したい。自身でも、ここには掲載しなかつた付記で、「自分を見つめ直すのたいへんよい機会だった」といつているのは、このことを体感した喜びを率直に告白したものといえよう。その間、何度か行きづまって私の所へ飛んで来たこともあるし、参考文献を求めて広島大学の国文研究室を訪れたこともあったようである。もちろん、研究の方法を十分体得しているとはいえないし、成果にも不備な点を指摘する人があるかも知れない。しかし、「浮舟」という人物を執拗に追い求める姿勢には、若いエネルギーを傾倒した一途さが見える。それは女性の最も美しい姿といってもよからう。

（清水文雄）